

第4節 用語

1. 人名

Bounleut Saycocie

右派大佐。1965年1月31日に政府ラジオ局や競技場を占拠し、クーデターを起こす。

Boun Oum na Champassak (1911-1980)

1911年12月2日、チャンパーサク王家にニューイ(Nhouy)殿下の長男として生まれる。教育はサイゴンで受け、ラオスで行政官吏となった。1945年の抗日運動に参加するが、1946年にはフランスの復帰をラオス南部で支援する。1946年8月に締結されたフランスとの暫定協定によって、チャンパーサク王位継承権を放棄することになり、ラオス王国の終身監査官となった。1947年には国王評議会議長に就任し、1949年3月21日から1950年2月28日まで首相を務めた。その後、ルアンパバーン王家への個人的抵抗と南部の利益擁護のために裏で活動するが、1960年には右派政権の首相に就任。また、第2次連合政権樹立のための3派会談では右派代表を務めた。1975年に病気治療のためフランスに渡り、1980年に死亡した。

Deuan Sunnalath (1927-1978)

1927年ヴィエンチャンに生まれる。コン・レの第2降下部隊では中尉としてクーデターに参加する。コン・レ軍は右派勢力の攻撃によってジャール平原に後退するが、ドゥアンはコン・レの作戦に反対し反撃を強く支持する。その後もコン・レへの反対を続け、1962年11月27日には、ドゥアン派の兵士がジャール平原のコン・レ軍に輸送を行っていたエア・アメリカ機を撃墜する。これを境にパテート・ラーオと中立派との関係が悪化し、ドゥアン派はパテート・ラーオとの協力関係を構築する。第3次連合政府では内務大臣を務め、人民民主共和国では人民代表者大会代表、内務・退役軍人・社会問題次官を務めた。

Faydang Lobliayao (1910-1986)

1910年4月5日、シェンクアン県でモン族の伝統的エリート家系に生まれる。日本軍と協力し抗仏運動を行い、日本の敗戦後はラーオ・イサラに参加し、東部ラオス抗戦委員会のメンバーとなり、主にシェンクアンでモン族ゲリラを率いた。1950年8月に行われた人民代表者大会に参加、抗戦政府では役職無しの大臣に就任し、1956年には愛国戦線中央委員となった。人民民主共和国では、1986年に死亡するまで最高人民議会副議長を務めた。ラオス革命英雄の1人である。

Inpeng Sournyathai (1923-)

1923年に生まれ、パリで法律や政治学を学んだ。当初は国益擁護委員会のメンバーであったが、その後はブーマを支持し始める。1960年の中立派内閣では財政大臣を務めた。1975年のパテート・ラーオによる権力掌握の際にはラオス大使としてロンドンに駐在しており、その後、パリに渡り反共組織を形成する。現在でも反政府活動を積極的に行っている。

Kampan Panya

パイ・サナニコーン内閣で外務大臣を務めた国益擁護委員会のメンバー。

Katay Don Sasorith (1904-1959)

1904年7月12日、ヴィエトナム人の父とラオス人の母の間に生まれる。ラーオ・イサラ亡命政府では1951

年から1954年まで財政大臣を務め、1954年には進歩党(Progressive Party)を形成し、プーマに代わり首相に就任するが、愛国戦線へは強硬姿勢をとった。また、第1次連合政府では内務・安全保障大臣を務めた。

Kavinh Koenakorn

パテート・ラーオ少佐。王国政府へのパテート・ラーオ政治代表団一員であったが、1955年9月に王国政府側に寝返る。

Kaysone Phomvihane (1920-1992)

1920年南部サワンナケートにヴェトナム人の父とラオス人の母の間に生まれる。中等学校からヴェトナム人学生のナショナリスト運動に積極的に参加、高等教育はハノイで受け、ハノイ大学在学中に共産主義活動に身を投じ、ヴェトナムと共に革命運動を行う。ハノイのリセではヴォー・グエン・ザップ(Vo Nguyen Giap)が教師だったとも言われており、ヴェトナム指導層との繋がりが深い。1945年10月にスパースウォンの独立運動に参加し、1946年からハノイでラオスとヴェトナムの調整役を務める。1949年1月にインドシナ共産党に入党し、ラオス人民解放軍の基礎となる戦闘団を形成する。1950年8月に形成されたラオス自由戦線では中央委員となり、抗戦政府では国防大臣に就任。1955年設立のラオス人民党では書記長を務め、以後、1992年に亡くなるまで書記長職を維持した。表舞台の指導者はスパースウォンだが、実質的な権力はカイソーンが握っていた。

Ketsana Vongsouvanh

コン・レ軍大佐。1963年2月12日、ジャール平原で暗殺。

Khammao Vilai (1892-1965)

パリで教育を受け、1917年にフランス植民地政府に勤務する。1945年10月12日に形成されたラーオ・イサラ臨時人民政府(ラーオ・イサラ政府)では首相を務めた。フランスのラオスへの復帰後、臨時抗戦政府はバンコクに亡命するが、1949年にプーマと共にヴィエンチャンに戻り、進歩党を結成した。1950年にはブイ・サナニコーン内閣で法務・厚生大臣を務めた。1955年には国王評議会議長に就任した。

Khamtay Siphandone (1924-)

1924年2月8日、チャンパーサック県の農家に生まれる。1945年にラーオ・イサラに参加し、ボラウエン高原地域でシトン・コマダムの抵抗勢力に加わった。1948年には南部ラーオ・イサラ代表、パテート・ラーオ南部軍管区の政治担当となった。1950年に形成されたラオス自由戦線では中央委員となり、1954年にインドシナ共産党に入党したと見られている。ラオス愛国戦線、ラオス人民党でも中央委員となり、1960年にはカイソーンに代わりパテート・ラーオ軍最高司令官に就任した。その後、1965年に設立されたラオス人民解放軍でも最高司令官を務め、1972年に行われた第2回人民革命党大会で政治局員となった。現在では人民革命党議長兼ラオス人民民主共和国大統領を務めているラオスの最高権力者である。

Khanti Siphantong

中立派大佐。1963年4月12日、ヴィエンチャンで暗殺される。

Kong Le (1934-)

1934年3月6日、サワンナケート県のパラン郡でプー・タイ族の農家に生まれる。1952年に王国軍に入隊し、降下部隊に配属される。1954年から1957年までラオス北部で対ヴェトナム歩兵部隊の一部を指揮し、1954年には異例の若さで将校に昇進。その後、タイやフィリピンでの訓練に参加し、大尉となった。1958年

には第2降下部隊副司令官に任命された。パテート・ラーオとの戦闘を通じて、問題の軍事的解決は不可能であり、ラオス人同士は戦いを望んでいないと実感するようになる。そして、1960年8月9日、ソムサニット右派政権に対しラオスの中立を掲げてクーデターを起こし、プーマ首相の下で中立内閣が成立する。しかし、12月にはノサワン将軍がヴィエンチャンを奪還し、コン・レ軍はジャール平原でパテート・ラーオ勢力と合流する。その後、中立派内部での分裂によって、ドゥアン・スンナラート大佐率いる愛国中立派が形成される。1963年2月にコン・レ軍ケッサナ大佐が中立左派に暗殺されたのを期に、右派との連携を余儀なくされる。1966年に失脚しパリに亡命するが、パテート・ラーオへの抵抗運動を続けた。

Kou Aphai (1892-1964)

1892年12月7日、チャンパーサク県に生まれる。植民地行政府に勤務し、1946年のフランスの復帰を歓迎した。1947年から49年にかけて国王評議会議長を務めた。1960年1月、ノサワン将軍の軍事介入後、サワンワッタナー国王に臨時政府首相に任命される。

Kou Voravong (1914-1954)

1914年12月6日、サワンナケートに生まれる。植民地行政府に参加し、抗日運動と共にラーオ・イサラにも反対する。1947年に左派ゲリラによって重傷を負われる。その後、ラオス統一党を形成し王国政府で法務・宗教大臣となる。1951年には民主党を形成し国会議長に就任する。1954年にはプーマ内閣で国防大臣となるが1954年9月18日に暗殺される。これが10月のプーマ政権崩壊に大きな影響を与えた。

Kouprasith Abhay (1926-)

南部ラオスの有力家系アパイ家に生まれる。1945年にラーオ・イサラに参加するが、1949年のラーオ・イサラの分裂によってヴィエンチャンに戻り、王国軍に参加する。当初はプーマの中立主義を支持するが次第にプーミ・ノサワン将軍に傾倒する。1960年12月のヴィエンチャンの戦いではコン・レ軍の後退に貢献、その後将軍に昇進し第5軍管区指揮官となる。1964年4月19日、第2次連合政府樹立に向けた会談が失敗に終わると、シーホー警察長官と共にクーデターを試みるが失敗。1975年5月、大衆デモの高まりによってタイに逃亡する。

Leuam Insisiengmay (1917-)

1917年8月7日、サワンナケート県に生まれる。ブン・ウム殿下の妹と結婚し、チャンパーサク王家との関係を築く。1945年、抗日運動ではフランス側について参加し、ラーオ・イサラには反対した。1947年から1950年まで、財政、内務、法務大臣などを務め、第1次連合政府では財政大臣を務めた。第2次連合政府では教育大臣、第3次連合政府では副首相を務めた。1975年にパテート・ラーオが権力を掌握する際には協力したため、政治再教育キャンプに送られなかった数少ない右派政治家である。

Ngon Sananikone (1914-)

1914年にヴィエンチャンの最有力家、サナニコーン家に生まれる。抗日運動に参加し、フランスの復帰を歓迎する。1951年に国会に選出され、1953年まで経済・財政担当次官を務める。その後も商業・工業大臣等を務め、ク・アパイ内閣では国防大臣、ブン・ウム内閣では商業・工業大臣となった。右派閣僚として第1次連合政府では国防・退役軍人・スポーツ・青年大臣、第2次連合政府では公共事業・運輸大臣、第3次連合政府では財政大臣と、3回の連合政府全てに参加した。1974年から右派政治家への批判が高まる中、1975年5月にタイを経てフランスに亡命した。

Nhia Veu Lobliyao (1921-1999)

シェンクアン県のモン族有力家系に生まれる。ファイダンの弟。ラーオ・イサラに参加し、ヴィエトミンと共に北東部で活動。ラオス自由戦線、ラオス人民党、ラオス愛国戦線で中央委員となる。

Nouhak Phoumsavan (1916-)

1916年南部サワンナケートの平地ラーオ族農民の家に生まれた。当時のパテート・ラーオ指導層では唯一の農民出身者である。当初、中国商人のトラック運転手を務めサワンナケートとヴィエトナム中部の間で運搬を行っていたが、1941年までに自身の運送会社を設立し、ヴィエトナム人との関係を築いていく。武器の運搬も行っていたと見られており、1941年から1945年の間にホー・チ・ミンやファン・バン・ドンといったヴィエトナム指導者によってリクルートされた。また、ヌーハックの2番目の妻はヴィエトナム人である。1945年にスパークスと接触、1946年には東部ラオス抗戦委員会の委員長となった。そして、1950年にインドシナ共産党員になったと言われている。同年形成された臨時抗戦政府では経済・財政大臣に就任した。その後、愛国戦線側の代表として王国政府との交渉に携わる。1954年のジュネーブ会議には出席が認められなかったがヴィエトナム代表団として参加。1955年に形成されたラオス人民党では中央委員となり、政治局では序列2位でカイソーン書記長の右腕として力を発揮した。

Ouane Rathikoun (1912-1978)

王国軍将軍。1945年からラーオ・イサラに参加し、1949年まで南部でゲリラ戦を行う。1949年に王国軍に入隊。1958年に国益擁護委員会(CDNI)に参加するが、1960年コン・レのクーデター後、プーマ中立内閣に国防担当次官として入閣。しかし、右派ノサワン将軍のヴィエンチャン奪還が近づくると右派に寝返る。1965年から1969年まで王国軍の総司令官を務めた。

Oudone Sananikone (1920?-)

ヴィエンチャンの最有力家サナニコーン家に生まれる。ラーオ・イサラに参加、亡命政府ではプロパガンダ担当となるが、1949年にヴィエンチャンに戻り王国軍に入隊。1960年コン・レによるクーデターではノサワン将軍派につき、1969年には王国軍参謀長となった。

Oun Sananikone (1907-1978)

1907年10月12日、ヴィエンチャンの最有力家、サナニコーン家に生まれる。南部のアパイ家とは婚姻関係にある。日本の敗戦時にはサワンナケートを占拠し、その後ベサラートやスパークスと接触、1945年ラーオ・イサラ政府では経済大臣に就任する。ラーオ・イサラ政府と共にバンコクに亡命後、1949年にヴィエンチャンに戻る。

Phaya Khamao

元ヴィエンチャン県知事で1945年10月に形成されたラーオ・イサラ政府首相。

Phetsarath Rattanavongsa (1890-1959)

1890年ルアンパバーン副王ブンコンの長男として生まれる。高等教育をフランスで受け、イギリスオックスフォードに滞在後、1913年にヴィエンチャンに戻りフランス理事長官府官吏となった。一方で、文化や歴史研究も行い、初期ラオスナショナリズムの形成に貢献した。1941年にはルアンパバーン王国副王に任命された。1945年4月、日本軍はルアンパバーン国王に独立宣言を行わせ、首相に任命されたベサラートはその独立を維持しようとするが、日本の敗戦後、国王はフランスの保護を承認し、ベサラートを解任する。ベサラートは各地にラーオ・イサラ委員会を設立し、その他組織と連携し独立運動を展開する。10月に形成されたラーオ・イ

サラ政府では国家元首に就任した。ラーオ・イサラ政府はフランスの復帰後、バンコクに亡命するが、1949年のフランス・ラオス協定を巡ってラーオ・イサラ政府は分裂する。ベサラートは1957年3月にラオスに帰国するまでバンコクに留まった。

Phoui Sananikone (1903-1985?)

1903年9月3日、ヴィエンチャンの最有力家系サナニコーン家に生まれる。1923年から植民地行政府に勤務し、1945年にナムター県知事に任命される。抗日運動に参加し、自由フランス勢力と一時中国へ逃れるが、ラオスに戻り1947年に王国政府で衛生・教育・社会福祉大臣に就任。1947年から1950年までは国会議長、1950年2月から1951年11月までは首相を務める。1954年のジュネーブ会議では王国政府代表団として王国政府と王国の正統性を守った。第1次連合政府では外務大臣として入閣、プーマの中立主義に反対し、1959年に首相に就任してからは、愛国戦線閣僚の逮捕など、愛国戦線に対して強硬路線を取る。第2次連合政府からは外れるが、国会議長としての地位を維持した。1975年人民民主共和国建設後はフランスに亡命した。

Phoumi Nosavan (1920-1985?)

1920年1月27日、サワンナケートに生まれる。植民地行政府に勤務するが、1945年には抗日運動に参加。また、ラーオ・ベン・ラーオとラーオ・イサラのメンバーでもあり、1946年のフランスの復帰に反対する。1946年からラーオ・イサラ亡命政府に参加し、ラオス南部でヴィエトミンと活動を行うが、1949年、ヴィエンチャンに戻り王国政府に参加する。1958年には左派の台頭に危機感を強め、軍や若手官僚と共に国益擁護委員会を形成し、1959年のサナニコーン内閣では国防担当次官となった。1960年コン・レ大尉のクーデターにより、一時サワンナケートに撤退するがアメリカの支援によりヴィエンチャンを奪還、1960年12月発足のブン・ウム内閣では副首相兼国防相となり、実権を握った。第2次連合政府では副首相兼財政大臣に就任するが、右派内部の権力闘争によって次第に権力を失っていく。1965年にクーデターを試みるが失敗しタイに逃亡した。

Phoumi Vongvichit (1909-1994)

1909年4月6日、シェンクアンに生まれ植民地行政府に勤務する。当初は自由フランスに協力するが次第にラーオ・イサラに参加し、1946年にフランスが復帰した際にはタイ北部に逃亡しラーオ・イサラ委員会を率いた。その後北ヴィエトナムでスパルヌウォンに合流し、1950年ラオス自由戦線書記、抗戦政府では副首相兼内務大臣に就任した。1955年、ラオス人民党の創設に携わり、政治局員となる。翌年1月にはラオス愛国戦線中央委員となった。第1次連合政府では宗教・芸術大臣、第2次連合政府では情報・宣伝・観光大臣、第3次連合政府では外務大臣を務めた。

Phoun Sipraseuth (1920-1994)

1920年2月16日ラオス南部に生まれる。ラーオ・イサラに参加しタケークでの戦闘も経験するが、タイには逃亡せず、東部ラオス抗戦委員会に加わった。1950年にインドシナ共産党員となり、1954年のジュネーブ協定までヴィエトミンの支援によりヴィエトナム国境付近でゲリラ活動を行う。ジュネーブ協定施行に伴う軍隊の統合では、大佐として王国軍と交渉を行った。人民党、愛国戦線では中央委員となり、1958年の補欠選挙ではタケークから選出された。1960年のコン・レのクーデター後、パテート・ラーオと中立派勢力との間で形成された高級軍事委員会副委員長を務め、その後將軍に昇格した。1972年に人民革命党政治局員となり、人民民主共和国では副首相兼外務大臣に就任。1991年第5回大会で引退する際には党内序列は第4位であった。

Quinim Pholsena (1915-1963)

1915年11月18日、チャンパーサク県バクセーでラオス人の父と中国人の母の間に生まれる。1945年の抗日運動に積極的に参加するが、ラーオ・イサラには反対していた。1951年にサムヌアから国会議員に選出さ

れ、1953年から1955年まで国会副議長を務める。1955年に平和・中立党(Santhipap Party)を設立する。1960年のブーマ中立内閣では情報大臣、第2次連合政府では外務大臣を務める。キニムは次第にパテート・ラオとの連携を深めていき、中立左派と見なされるようになった。1963年4月1日に暗殺され、これを機に第2次連合政府が崩壊することになる。

Savang Vatthana (1907-1980?)

1907年11月13日ルアンパバーンに生まれ、フランスで教育を受ける。フランスの再植民地化に積極的に協力する。1959年11月1日に即位し、以後16年間立憲君主として統治する。第2次連合政府成立後は、ブーマ首相を支持するが反共親米であった。人民民主共和国成立後は大統領顧問に就任するが、1977年に再教育キャンプに送られ、1980年頃死亡したと見られている。

Sisavang Vong (1885-1959)

1885年7月14日に生まれる。パリで教育を受け、1904年8月28日に王位を継承した。1905年3月4日に正式に即位する。1945年4月、進駐してきた日本軍により、独立を宣言させられるが、日本の敗戦後、フランスの保護継続を宣言する。1947年、フランス・ラオス暫定協定により統一ラオスの王となる。1959年10月29日に死亡。

Siho Lamphouthacoul (1934-1966)

1934年南部ラオスに生まれる。プーミ・ノサワン将軍の下で権力を掌握する。ヴィエンチャンの戦い後、ノサワン将軍が組織した準軍事警察の責任者となり、1964年にはクバシット・アパイ将軍と共にブーマ首相に対するクーデターを試みるが、アメリカの支援を得られずに失敗に終わる。1965年に2月、軍部とシーホーの勢力との間で対立が起こり、かつて共にクーデターを率いた仲間であるアパイ将軍に破れ、タイに逃亡する。

Singkapo Sikhotchounlamany (1913-2000)

1913年2月10日、タケークの有力家系に生まれる。ラーオ・ベン・ラーオに参加し、スパーヌウォンがタケークに到着後、解放勢力の参謀長に任命される。ラオス自由戦線では中央委員となり、1953年には大佐に就任し、パテート・ラーオ軍の指揮を執った。1960年にはヴィエンチャンの戦いでノサワン将軍勢力と戦う。しかし、ラオス人民党内部では大きな影響力を持たなかった。

Sisomphone Lovansai (1916-1993)

1916年7月7日、ボリカムサイ県に生まれる。黒タイ族。1956年にラオス愛国戦線中央委員となり、その後、シェンクアン県で政治局担当となる。1972年には人民革命党中央委員、政治局員となり、党内序列は第7位となった。

Sithon Komadam (1910-1977)

1910年8月2日、南部アッタプー県ボラウェン高原で、1901年から1907年まで抗仏運動を行ったカー族(ラーオ・トゥン)の伝統的首長コマダムの息子として生まれる。1937年にフランスによって捕らえられるが日本軍の進駐によって自由の身となり、日本の敗戦後はラーオ・イサラ運動に参加した。フランスの再植民地化の際には南部でラーオ・イサラゲリラを率いた。ラーオ・イサラ政府解散後もラオス南部でゲリラ戦を続けた。1950年8月に行われた人民代表者大会に参加し中央委員となり、抗戦政府では役職無しの大臣に就任した。1956年には愛国戦線中央委員となり副議長に就任。1958年の補欠選挙ではサラワン県から国会議員に選出された。人民民主共和国では最高人民議会副議長を務めた。ラーオ・トゥンを代表するラオス革命英雄の1人である。

Somsanith Vongkotrayana (1913-1980?)

1913年4月19日、ブンコン副王の傍系家系に生まれる。ラーオ・イサラ政府では内務大臣となり、第1次連合政府では内務担当次官となった。1960年には首相になるが8月のコン・レのクーデターによって倒される。その後は国会議長や王国評議会委員などを務めた。

Sot Phetrasy

愛国戦線ヴィエンチャン代表。第3次連合政府で経済・計画大臣に就任。

Souphanouvong (1909-1995)

1909年、ルアンパバーンのブンコン副王の子息として生まれる。ハノイのリセ卒業後、パリで土木工学を学び、1937年に卒業しインドシナに戻る。ラオスではなくヴィエトナムのニャ・チャンの公共事業局で働き、ヴィエトミンを支持するヴィエトナム人女性と結婚。日本の敗戦後すぐにハノイに向かいホー・チ・ミンと会談、ラオス独立運動を展開することで合意する。ヴィエトミンの武装護衛に守られながら、ラオスのサワンナケートに戻り、ウン・サニコーンと共にタケークで南ラオス解放委員会を設立。名誉委員長にベサラート、委員長にスパヌウォン、副委員長にウン・サニコーンが就任した。10月末にヴィエンチャンに戻るが、それまでにラーオ・イサラ政府が形成され、外務大臣と軍司令官に就任する。フランス軍の再植民地化に抵抗するが、タケークの戦いで重傷を負いタイに逃れた。ヴィエトミンとの協力を維持するスパヌウォンは次第に政府内で孤立し、1949年のフランス・ラオス協定によるフランス連合内の独立を巡って完全に分裂する。その後、ヴィエトナムへ向かい、1950年8月にヴィエトナム解放区で第1回人民代表者会議を開催し、ラオス自由戦線(Neo Lao Issara)と抗戦政府を形成する。ラオス内戦時代には中立を唱えるプーマとの交渉を行い、3度の連合政府にいずれも参加する。1955年に形成されたラオス人民党の創立メンバーであり、政治局内序列は死亡するまで3位であったがそれ程権力を保持していなかったと見られている。ラオス愛国戦線(Neo Lao Hak Sat)の議長も務め、表舞台の指導者であった。

Souvannalath (1893-1960)

ブンコン 副王の息子としてルアンパバーンに生まれる。ベサラート、スワンナ・プーマ、スパヌウォンとは異母兄弟である。1947年3月15日、フランス・ラオス暫定協定内で設立されたラオス王国立憲政府初代首相に就任。

Souvanna Phouma (1901-1984)

1901年10月7日、ブンコン副王の3男としてルアンパバーンで生まれる。プーマはベサラート殿下の弟であり、スパヌウォン殿下の異母兄にあたる。ハノイで教育を受け、フランスで土木工学と電気工学の学位を取得し、1931年にラオスに帰国し、公共事業局に勤務した。1945年10月、プーマはベサラート殿下のラーオ・イサラ独立運動を支持し、ラーオ・イサラ政府で公共事業大臣に就任する。1946年4月にフランスがラオスに復帰すると、他のメンバーと共にバンコクへ亡命する。1949年7月にフランス・ラオス協定が締結され、フランス連合内でラオスの独立が承認されると、ラーオ・イサラ亡命政府内で独立を巡り分裂が生じ、1949年10月24日に亡命政府は解散する。プーマはフランス連合内での独立を支持し、ヴィエンチャンに帰国する。その際、ラオスは小国で人材も不足しているため、外国の協力が国家建設には必要という考え、王族としてこの機会にラオスに帰国しなければ地位や権力が危うくなるという2つの考えが作用したと言われている。帰国後、プイ・サニコーン政権で公共事業・計画大臣を務め、1951年11月から1954年10月までは自身が首相を務めた。1954年のジュネーブ協定締結後、プーマの中立主義に対する右派やアメリカの反対により一度は首相を辞任するが、1956年3月に首相に復帰し、パテート・ラーオと交渉を開始。同年8月に第1次連合政府を樹立する。しかし、右派やラオスの左傾化を危惧するアメリカの圧力により、8カ月で第1次連合政府は崩壊する。

その後、1960年のコン・レ大尉によるクーデターで再び首相となり、3派の合意により1962年6月に第2次連合政府を樹立する。しかし、右派対左派の対立が激化し、連合政府はわずか10カ月で崩壊してしまう。プーマの中立主義も次第に右派と左派の間で揺れ動くが、1973年に停戦が合意し、1974年4月に3度目の連合政府を樹立する。1975年12月2日にラオス人民民主共和国が建国されてからは、共和国政府顧問に就任し、1984年1月10日に82歳で死亡した。一貫してラオスの中立を唱えた人物である。

Thao Ma

王国空軍司令官であり、アメリカからは最も技術のある操縦士と見られていた。1966年、ウン・ラティコン将軍の私用のための飛行を断り(将軍はアヘンの密輸を行っていた) サワナケートからヴィエンチャンへの異動を命じられた。しかし、それを拒否するだけでなく、軍司令部を爆撃し、タイに逃亡した。

Vang Pao (1931-)

モン族ゲリラの指導者。1931年シェンクアン県に生まれる。フランスの秘密エージェントとして抗日運動を行う。1951年から1952年に軍事訓練学校に通い、1953年から1954年にはルアンパバーンでヴィエトミン軍と戦った。1960年、中立派軍がジャール平原に撤退してきた時はシェンクアン駐屯軍を率いていた。第2次連合政府期には、ロンチェンに拠点を設立、モン族青年をリクルートし、アメリカCIAによって訓練や武器支援を受けた。1964年12月、第2次連合政府崩壊後、第2軍管区司令官に就任し、CIAの協力で秘密軍隊の設立を行った。パテート・ラーオ軍との戦闘を繰り返し、劣勢でも戦闘を継続するが、最終的にはタイに逃亡する。現在はアメリカ在住であり、反共運動を行っている。

2. 組織名

アメリカ・オペレーション・ミッション (United States Operations Mission)

ラオスへの経済・軍事支援を統括していた組織であり、1955年1月1日から1962年10月6日までヴィエンチャンで活動を行った。

愛国中立派 (Patriotic Neutralist)

コン・レ軍から分離し、パテート・ラーオ側についた中立派勢力。コン・レ軍のドゥアン大佐はコン・レの政策、特にアメリカからの支援について反対し、1963年の中立派勢力とパテート・ラーオの戦闘でパテート・ラーオ側についた。その後、ポンサリー県知事であるカムアン・ブッパ大佐率いる勢力と統合し、愛国中立派を形成する。

エア・アメリカ (Air America)

アメリカ政府と契約を結んでいるアメリカ空軍の支援をうけた民間チャーター会社

軍事支援顧問団 (Military Assistance and Advisory Group: MAAG)

PEOの後を受けて形成されたラオス支援のためのアメリカの軍事支援組織。

抗戦政府

1950年8月のラオス自由戦線第1回全国代表者大会で形成されたが、中国やソ連を含め、諸外国の承認は得られなかった。

国王評議会 (King's Council)

12人の重臣によって構成される機関であり、6人は国王から直接任命され、残りの6人は国会との協議の上に出選される。評議会は国会を通過した法律を検討し、国王の承認を付与するかどうか国王に助言を行う。

国益擁護委員会 (Committee for the Defense of the National Interests)

1958年6月10日、若手官僚や軍幹部によって設立されたエリート政治組織であるが、公式政党ではない。行政改革を訴えるが、ブーマの中立主義に反対、パテート・ラーオへの強硬路線をとり右派政権確立を目指す。主たる指導者はインペン・スリニャタイ、シソーク・ナ・チャンパーサク、プーミ・ノサワン、ウン・ラティコン。

国際監視委員会 (International Commission for Supervision and Control)

1954年ジュネーブ協定に基づき、協定の実施を保証するためインドを議長にカナダ、ポーランドによって構成された委員会。委員会は一連の中間報告書を作成するが、パテート・ラーオによる妨害や協力不足により、1958年7月20日に無期限の休止に入った。1961年5月8日、ジュネーブ会議開催に向けたイギリス、ソ連両国の呼びかけによって委員会はラオスに復帰する。

進歩党 (Progressive Party)

1950年7月、タイに亡命していたラーオ・イサラ臨時人民政府からラオスに戻ったスワンナ・ブーマとカマオ・ウィライによって設立された政党。プイ・サナニコーンの独立党によって反対されていたが、1958年に開催された補欠選挙で左派が勝利し、また、国益擁護委員会が形成されたのを受けて、両党は合併しラオス人民連合 (Rally of the Lao People) を形成する。

東部ラオス抗戦委員会 (Resistance Committee of Eastern Laos)

ラオス東部で抗仏闘争を行っているラーオ・イサラ諸集団を組織化するため、ヴィエトミンの指導の下に形成された組織。

パテート・ラーオ (Pathet Lao)

一般的には抗仏、抗米、ラオスの革命運動全般を指して使用されることが多いが、正式にはラオス自由戦線。その後1956年に改称され形成されたラオス愛国戦線の戦闘部隊の名称である。文字通りの意味は「ラオス国」ある。

プログラム評価事務局 (Program Evaluation Office: PEO)

1955年12月に設置されたアメリカによる王国政府への軍事支援を管理する組織。1954年ジュネーブ協定によって、フランス軍事ミッション以外、ラオスへの外国軍事要員の駐留は禁止されており、PEOは退役軍人等の正規の制服を着用しない軍事要員によって構成された。

平和・中立党 (Santhiphap Pen Kang)

ラオスの中立化を掲げ、1955年にキニム・ボルセナによって形成された政党。

民主党 (Democratic Party)

1948年にク・ウォラウオンによって設立された政党。

ラーオ・イサラ (Lao Issara)

ラオスへのフランスの復帰に抵抗し、ペサラート殿下が率いた独立運動。ラオスの独立運動には、東北タイで活動したラーオ・セーリー、南部のラーオ・ペン・ラーオ、タケークの救国戦線などがあり、これらの独立運動を総称し「ラーオ・イサラ」(自由ラオス)と呼ぶ。

ラーオ・イサラ臨時人民政府

フランスのラオスへの復帰に抵抗するため、1945年10月12日にラーオ・イサラによって形成された。しかし、1946年4月にフランスの復帰が達成されると、バンコクへの亡命を余儀なくされ、バンコクを拠点にフランスへの抵抗を継続した。1949年7月にフランス・ラオス協定が締結され、フランス連合内でのラオスの独立が実現すると、その独立を巡って臨時人民政府内で意見が分かれ、同年10月には正式に解散した。

ラオス中立党 (ラーオ・ペン・カーン : Lao Pen Kang)

1961年9月、スワンナ・ブーマが自身を代表に、コン・レとベン・ボンサワンを副代表に形成した政党。

ラーオ・ペン・ラーオ (Lao Pen Lao)

ラオス人のためのラオスを目指し、ラオスや東北タイに住むラオス人をリクルートするため、1945年に形成された組織。次第にラーオ・イサラに参加する。

ラオス愛国戦線 (Neo Lao Hak Sat)

ラオス自由戦線の後継組織。1956年1月6日、ラオス自由戦線が全国大会を開催し、大衆の広範な支持を得るため名称をラオス愛国戦線に改称する。愛国戦線は正式な政党として認可され、1958年の補欠選挙では13人の候補者を立て、9人が当選した。結成からその活動はラオス人民党と後継のラオス人民革命党によって指導され、党の大衆戦線組織としての役割を果たしていた。

ラオス自由戦線 (Neo Lao Issara)

フランス連合内でのラオスの独立に反対したラーオ・イサラのメンバーが、1950年8月に第1回全国人民代表者大会を開催し、ヴィエトミンの協力の下に形成した抗仏組織。大会では、スパヌウォンを議長に20人の中央委員を選出した。

ラオス人民解放軍 (Lao People's Liberation Army: LPLA)

パテート・ラーオの後継組織。パテート・ラーオは1965年10月に人民解放軍に改称する。その後、ラオス人民民主共和国建国の翌年に人民解放軍は人民軍に改称した。

ラオス人民革命党 (Phak Pasason Pathiwat Lao)

ラオス人民党の後継組織。1972年2月3日から6日まで開催されたラオス人民党第2回党大会で、ラオス人民党はラオス人民革命党に改称する。

ラオス人民党 (Phak Pasason Lao)

1955年3月22日、北ヴィエトナムの支援の下に、カイソーン・ボムウィハーンを書記長に結成されたラオス初のマルクス・レーニン主義政党。1975年12月2日のラオス人民民主共和国樹立まで、裏でラオス愛国戦線を指導し表舞台に現れることはなかった。1972年の第2回党大会で名称をラオス人民革命党に改称する。

3 . 地名

解放区

パテート・ラーオの軍事、行政支配下にある地域。

カンカーイ (Khang Khay)

ジャール平原の町。ヴィエンチャンの戦い後、中立派がジャール平原に撤退し、スワンナ・ブーマ中立政府の本拠地となった。

サムヌア (Sam Neua)

現在、ラオス北東部フアンパン県の県庁所在地であり、パテート・ラーオの拠点がサムヌアから約 24 kmのヴィエン・サイに位置していた。

ジャール平原 (Plain of Jar)

シェンクアン県海拔 1,200m ~ 1,500m にある平原。平原には石壺が転がっている一帯があり、この場所を訪れたフランス人が Plain of Jar (壺の平原) と呼んだことが名前の由来である。右派、中立派、左派にとって戦略的重要地域であり、1964 年以降はこの地域で激しい戦闘が行われた。

タケーク (Thakhek)

現在、カムアン県の県庁所在地。フランス植民地時代には支配の中心地であり、1946 年 3 月、ラオスに戻ってきたフランス軍とヴィエトナムの支援を受けたラーオ・イサラとの間で激しい戦闘が行われた。「タケークの戦い」と呼ばれている。

チャンパーサク (Champassak)

ラオス南部の県。1932 年から 1945 年までは、セードーン、チャンパーサク、シタンドンの 3 つに別れていたが、ラオス人民民主共和国の建国によって、チャンパーサク県に統合された。

パドン (Phadong)

ジャール平原南部約 100 km に位置するワン・パオ將軍率いる秘密部隊の軍事拠点。

プーパティー (Phu Pha Thi)

フアンパン県にある 1900m の山の山頂。北ヴィエトナム国境から 20 km の所に位置し、1967 年 10 月後半、アメリカは最重要機密であるレーダー・航空統制指令施設を設置した。主な任務は、北ヴィエトナムへの爆撃誘導、アメリカ兵の救出、情報収集などであった。1968 年 3 月 11 日には、北ヴィエトナムの支援によって、パテート・ラーオが施設を占拠する。

ボンサリー (Phong Saly)

ラオス北部に位置する県で、中国、ヴィエトナムと国境を接している。第 1 次インドシナ戦争時にパテート・ラーオの支配下となり、1954 年のジュネーブ協定ではフアンパン県と共にパテート・ラーオの再結集地となった。1957 年 11 月のヴィエンチャン協定で行政権が王国政府に返還されたが、連合政権の崩壊により再びパテート・ラーオの支配下に置かれた。

ロンチェン (Long Cheng)

ワン・バオ將軍率いる秘密部隊の拠点。CIA や Air America には Lima Site 98 または Lima Site 20A として知られている。ラオスにおけるアメリカの秘密戦争の中心地。

4 . その他

ヴィエンチャンの戦い (Battle of Vientiane)

1960 年 12 月初め、アメリカ CIA によって訓練、支援された右派勢力は中立派が支配していたヴィエンチャンに迫っていた。プーマ首相による武力衝突回避工作は失敗に終わり、プーマは 12 月 9 日プノンベンに移動し、その 4 日後に右派勢力とコン・レ軍による衝突が始まった。12 月 16 日にはコン・レ軍はジャール平原への撤退を開始した。負傷者は 500 人から 800 人と見られており、そのほとんどは中国やヴィエトナム系商人とその家族であった。

タケークの戦い (Battle of Thakhek)

1946 年 2 月のフランス・中国協定に基づいて、中国国民党は 3 月末までにインドシナ北部から撤退することになっていた。それに伴い、3 月 17 日にフランス軍はサワンナケートを占拠し、パクセーから北上を開始した。ラーオ・イサラ勢力はスパヌウォンとウン・サナニコーンの指揮の下、タケークでフランスに抵抗を開始したが、3 月 21 日のタケーク市街戦で退却を余儀なくされ、タイに逃れた。

5 . ヴィエトナム

インドシナ共産党

当時コミンテルンの活動家であったグエン・アイ・コック (後のホー・チ・ミン) は 1930 年 1 月に香港でヴィエトナム共産党を形成する。同年 10 月にインドシナ共産党に改称。

ヴィエトナム労働党

1951 年 2 月に開催された第 2 回党大会において、インドシナ共産党は民族大団結を重視し、名称をヴィエトナム労働党に改称した。

ヴィエトミン

ヴィエトナム独立同盟の略称であり、フランスと日本による植民地支配からの独立を目的に、1941 年 5 月にホー・チ・ミンの下に設立された組織。

南ヴィエトナム民族解放戦線

1959 年 1 月 13 日、ヴィエトナム労働党は第 15 回党中央委員会拡大総会を開き、早急に南部を開放するため、南部の武力解放と民族統一戦線の設立を目的とした「15 号決議」を決定した。これにより、1960 年 12 月 20 日に南ヴィエトナム民族解放戦線が設立される。